

召喚の光が消えた瞬間、神殿は凍りついたような静寂に包まれた。

エリアナは祭壇の上で膝をつき、自分を取り囲む神官たちの顔を見上げた。期待に満ちていたはずのその表情は、今や嫌悪と恐怖に歪んでいる。

「闇……闇属性だと……？」

神官長の震える声が、大理石の床に反響する。

エリアナの手のひらから立ち上っているのは、聖女に相応しい光ではなく、深い紫がかった黒い靄だった。それは彼女の指先から煙のように揺らめき、まるで生き物のように蠢いている。

「こんなことは前代未聞だ。闇の聖女など……」

「穢れている！」

「魔女だ！」

次々と浴びせられる罵声に、エリアナは身を縮めた。自分でも何が起き

ているのか分らない。ただ、異世界に召喚されたという事実と、自分が忌み嫌われているという現実だけが、痛いほど理解できた。

「追放せよ。闇の森へ」

神官長の宣告は、冷酷で容赦がなかった。

「あそこには魔物が巢食っている。貴様のような闇に染まった者には相応しい場所だ」

エリアナは声を出そうとしたが、喉が詰まって何も言えなかった。助けを求めることも、弁明することも許されないまま、彼女は神殿の衛兵たちに両腕を掴まれ、引きずられていく。

そして数時間後、彼女は闇の森の入り口に放り出された。

背中から地面に叩きつけられ、エリアナは呻き声を上げた。振り返ると、

衛兵たちはすでに馬を駆って去っていく。召喚の儀式で着せられた白い聖女の衣装は、既に泥と涙で汚れている。

立ち上がろうとしたが、足が震えて上手く力が入らない。恐怖と絶望が、全身を支配していた。

闇の森。

その名の通り、鬱蒼とした木々が空を覆い、昼間だというのに薄暗い。遠くから聞こえる獣の鳴き声が、彼女の恐怖を煽る。

「どうして……どうして私が……」

誰にともなく呟きながら、エリアナは森の中へと歩き始めた。戻る場所はない。ここで待っていても、魔物に襲われて死ぬだけだ。ならば少しでも森の奥へ、何か安全な場所を探すしかない。

しかし森は想像以上に過酷だった。

木の根に足を取られて何度も転び、茨で腕や足を切り裂かれる。喉は渴き、空腹が腹を締め付ける。それでも歩き続けるしかなかった。

日が傾き始めた頃、エリアナの体力は限界に達していた。大きな木の根元に倒れ込み、荒い息を吐く。もう立ち上がる力も残っていない。

その時だった。

ガサガサと、茂みが揺れる音がした。

エリアナは反射的に身構えたが、動くことすらできない。茂みから姿を現したのは、灰色の毛皮を持つ巨大な狼だった。いや、狼にしては大きすぎる。魔物だ。

黄色く光る目が、エリアナを捉える。

死ぬ、と彼女は思った。

魔物が唸り声を上げ、飛びかかってくる。エリアナは目を閉じ、身を縮

めた。

しかし、予想した衝撃は来なかった。

代わりに聞こえたのは、魔物の断末魔の鳴き声だった。

恐る恐る目を開けると、魔物は数メートル先で倒れている。その巨体を貫いているのは、黒い影で形作られた槍だった。

「……誰？」

エリアナが震える声で問うと、彼が姿を現した。

木々の影から歩み出てきたのは、長身の男性だった。漆黒の髪と、深い紫の瞳。その瞳は、エリアナ自身の力と同じ色をしている。彼の纏う黒いローブは風に揺れ、その姿はまるで闇そのものが人の形を取ったかのようにだった。

「闇の森に迷い込む人間など、久しぶりだな」

低く、冷たい声だった。感情の読めない瞳が、エリアナを見下ろしている。

「あ……あの……」

「礼を言う必要はない。お前を助けたのは興味本位だ」

男はエリアナの前に膝をつき、その顔を覗き込んだ。近くで見ると、彼の美しさは人間離れしている。完璧な造形の顔立ち、そして何より、その纏う雰囲気は尋常ではない。

「お前から、闇の気配がする」

男の指が、エリアナの頬に触れた。冷たい指先が、彼女の肌を撫でる。

「聖女の衣装を着ているが……闇属性の聖女とは、面白い」

「あなたは……」

「俺はヴァレン。この闇の森を統べる、影の王だ」

影の王。その名前に、エリアナは聞き覚えがあった。神殿で聞いた恐ろしい伝説の中に、その名があった。人間を憎み、闇の森で魔物を従えて生きる、恐るべき存在。

しかしエリアナには、もう恐れる余裕もなかった。

「お願い……助けて……」

彼女は震える手で、ヴァレンのローブの裾を掴んだ。

「私には……もう、行く場所がないの……」

ヴァレンは無表情のままエリアナを見つめていたが、やがて小さく息を吐いた。

「……来い」

彼はそう言っただけで立ち上がり、エリアナを抱き上げた。疲労で重くなった体が、いとも簡単に持ち上げられる。

「お前の力に興味がある。俺の城に來い。その代わり……」

ヴァレンの紫の瞳が、エリアナを見下ろす。

「お前は、俺のものになれ」

それは命令だった。しかしエリアナには、拒否する理由がなかった。むしろ、初めて自分を受け入れてくれた存在に、縋りつきたかった。

「……はい」

か細い声で答えると、ヴァレンは満足そうに頷いた。

そして影が彼らを包み込み、次の瞬間、エリアナの視界は闇に溶けた。

目を開けると、そこは豪華な部屋だった。

黒を基調とした内装に、深紫のカーテンと絨毯。天蓋付きの大きなベッドが部屋の中央にあり、壁には燭台が灯っている。

「ここは……」

「俺の城だ。この部屋をお前に与える」

ヴァレンはエリアナをベッドに降ろすと、彼女から少し離れた場所に立った。

「まずは休め。明日から、お前の力を引き出す訓練を始める」

「訓練……？」

「お前は自分の力を理解していない。それでは宝の持ち腐れだ」

ヴァレンの言葉に、エリアナは自分の手のひらを見つめた。あの黒い靄は、今は出ていない。自分の意志でコントロールできるものなのか、それすら分らない。

「でも、私には……」

「できるできないは、やってみなければ分らない」

ヴァレンは冷たく言い放つと、扉に向かって歩き出した。

「食事は後で使用人に運ばせる。今は休んでいろ」

そう言い残して、ヴァレンは部屋を出て行った。

一人残されたエリアナは、ベッドに倒れ込んだ。柔らかい寝具が、疲れ切った体を包み込む。

ここが安全なのか、ヴァレンが本当に信用できるのか、まだ分からない。でも今は、追放されて絶望していた数時間前よりは、ずっとマシな状況だった。

少なくとも、ここには自分を拒絶する人間はいない。

その事実だけで、エリアナの心は少しだけ軽くなった。

翌朝から、訓練が始まった。

城の中庭で、ヴァレンはエリアナの向かいに立っている。

「まず、お前の力を意識的に引き出すことから始める」

「どうやって……？」

「感じろ。お前の中にある闇を。それは恐れるべきものではない。お前の一部だ」

ヴァレンの言葉に従い、エリアナは目を閉じた。自分の内側に意識を向ける。

最初は何も感じなかった。しかし集中を続けると、胸の奥に何か冷たいものが蠢いているのが分かった。それは確かに闇だ。神殿の人々が恐れた、あの力。

「いいぞ。それを引き出せ」

ヴァレンの声に導かれ、エリアナはその力に手を伸ばす。すると、手の

ひらから黒い靄が立ち上った。

「できた……！」

「まだ形が定まっていらないが、悪くない」

ヴァレンは満足そうに頷くと、自分の手のひらにも闇を集めた。彼の闇は靄ではなく、明確な形を持っている。それは小さな球体となり、手のひらの上で回転している。

「闇の力は、意志によって形を変える。お前もこれくらいはできるようなれ」

そう言って、ヴァレンは球体をエリアナに向かって放った。エリアナは反射的に身を引いたが、球体は彼女の頬を掠めただけで、背後の木に当たって消えた。

「な、何を……！」

「実戦でしか身につかないこともある。さあ、お前も俺を狙ってみろ」
ヴァレンの挑発的な笑みに、エリアナは思わず奥歯を噛んだ。怖い、という気持ちはあった。でも同時に、この人に認められたい、という思いが湧き上がってきた。

手のひらの闇に集中する。形を作る。球体に。

しかし闇は靄のまま、形にならない。

「集中が足りない。もっと明確にイメージしろ」

ヴァレンの声が、冷たく響く。

エリアナは何度も試した。しかしどれだけ頑張っても、闇は靄のままだった。やがて疲労で膝をついてしまう。

「……すみません」

「謝るな。初日からできる者などいない」

ヴァレンはエリアナの前に膝をつき、その顎を掴んで顔を上げさせた。

「お前には才能がある。それを俺が引き出す。焦るな」

紫の瞳が、真っ直ぐにエリアナを見つめている。その瞳には、冷たさだけでなく、何か別の感情も浮かんでいるように見えた。

「はい……」

エリアナが頷くと、ヴァレンは彼女を立ち上がらせた。

「今日はここまでだ。部屋に戻って休め」

こうして訓練の日々が始まった。

毎日、朝から昼過ぎまで訓練が続く。ヴァレンは厳しかったが、決して無理は強いなかった。エリアナの限界を見極め、適切な休憩を与える。

そして訓練の合間に、二人は少しずつ言葉を交わすようになった。

「ヴァレン様は、どうして人間を避けているのですか？」

ある日の休憩中、エリアナは勇気を出して尋ねた。

ヴァレンは木に背を預けたまま、空を見上げている。

「避けているわけではない。人間が俺を恐れて近づかないだけだ」

「でも……」

「昔、俺は人間に裏切られた」

ヴァレンの声が、低く沈む。

「俺を利用して、用が済んだら排除しようとした。だから俺はこの森に来た。ここなら誰にも邪魔されない」

その言葉に、エリアナは胸が痛んだ。自分も追放されたから、その孤独が少しでも理解できる。

「……私も、似たようなものです」

エリアナは自分の手のひらを見つめた。

「闇の力を持っているというだけで、人々は私を恐れた。拒絶した。居場所なんて、どこにもなかった」

「だからお前は、ここにいる」

ヴァレンが立ち上がり、エリアナの前に立った。

「お前の居場所は、ここだ。俺の隣だ」

その言葉は、命令のようでもあり、約束のようでもあった。

訓練を始めて二週間が経った頃、エリアナは少しずつ闇を形にできるようになってきた。まだ球体を作ることとはできないが、靄を糸状に伸ばしたり、薄い膜のように広げたりすることができる。

「上達が早いな」

ヴァレンは珍しく、素直に褒めてくれた。

「ヴァレン様が、良い先生だからです」

エリアナの言葉に、ヴァレンは一瞬だけ驚いたような表情を見せた。そしてすぐに、いつもの無表情に戻る。

「……調子に乗るな。まだまだ未熟だ」

でもその声には、どこか嬉しそうな響きがあった。

訓練の後、二人は城の図書室で過ごすことが多くなった。エリアナは本を読み、ヴァレンは書類仕事をしている。特に会話をするわけでもないが、この静かな時間が心地よかった。

「ヴァレン様」

ある日、エリアナは本から顔を上げて呼びかけた。

「何だ」

「ありがとうございます」

「何の話だ」

「私を、拾ってくれて。訓練してくれて。ここに居場所をくれて」

エリアナの言葉に、ヴァレンは手を止めた。紫の瞳が、エリアナを見つめる。

「礼を言われるようなことはしていない。俺はただ、お前の力が欲しかっただけだ」

「それでも……嬉しいんです」

エリアナは微笑んだ。

「ヴァレン様は、私を拒絶しなかった。それだけで、私は……」

言葉を続けようとしたが、急に恥ずかしくなって口を閉じた。

ヴァレンはしばらくエリアナを見つめていたが、やがて立ち上がって彼女の側に来た。

「エリアナ」

名前を呼ばれ、エリアナは顔を上げた。ヴァレンがこんなに近くにいる。

「お前は……」

ヴァレンの手が、エリアナの頬に触れた。

「お前は、もう俺のものだ。それを忘れるな」

その言葉は所有の宣言だったが、エリアナはそれを嫌だとは思わなかった。むしろ、必要とされていることが嬉しかった。

「はい……」

エリアナが頷くと、ヴァレンは満足そうに微笑んだ。それは彼女が初めて見る、本当の笑顔だった。

それから数日後、転機が訪れた。

夜、エリアナは城の廊下を歩いていった。眠れなくて、少し外の空気を吸いたかったのだ。

窓から見える月は、闇の森を蒼白く照らしている。美しい景色だと、エリアナは思った。神殿の人々が恐れるこの森も、今では彼女にとって安らぎの場所になっている。

そう思いながら歩いていると、前方からヴァレンが現れた。

「こんな時間にどうした」

「眠れなくて……ヴァレン様こそ」

「俺も同じだ」

ヴァレンはエリアナの隣に並んで歩き出した。二人で並んで歩くのは、訓練以外では初めてかもしれない。

「星が綺麗ですね」

「……そうだな」

しばらく無言で歩いていたが、やがてヴァレンが立ち止まった。

「エリアナ」

「はい？」

「お前は……俺のことを恐れないのか」

突然の質問に、エリアナは首を傾げた。

「恐れる理由がありません」

「俺は影の王だ。人間たちが恐れる存在だ」

「でも、ヴァレン様は私を助けてくれました。訓練してくれて、居場所をくれました」

エリアナは真っ直ぐにヴァレンを見上げた。

「それに……ヴァレン様は、優しいです」

「優しい……？」

ヴァレンは信じられないという表情で、エリアナを見つめた。

「誰も俺をそんな風に言ったことはない」

「でも本当です。厳しいけれど、無理はさせない。私のことを、ちゃんと見てくれている」

エリアナの言葉に、ヴァレンの表情が揺れた。紫の瞳に、複雑な感情が浮かんでいる。

「お前は……不思議な女だ」

そう呟いて、ヴァレンはエリアナの肩に手を置いた。

「エリアナ、もう一度聞く。お前は本当に、俺のものになる覚悟があるのか」

その問いかけに込められた意味を、エリアナは理解した。それは単に力

を貸すということではない。もつと深い、もつと根源的な意味での所有だ。
でもエリアナは迷わなかった。

「はい。私は……ヴァレン様のものです」
その答えを聞いた瞬間、ヴァレンの瞳が暗く燃え上がった。

「……後悔しても、知らないぞ」

そう言うと、ヴァレンはエリアナの手首を掴み、歩き出した。引っ張られるように、エリアナは彼について行く。

辿り着いたのは、ヴァレンの私室だった。

扉が閉まると同時に、ヴァレンはエリアナを壁に押し付けた。両手を壁について、エリアナを閉じ込めるような姿勢。

「ヴァレン、様……？」

「お前は俺のものだと言った。ならば、それを証明してもらおう」

ヴァレンの顔が近づいてくる。紫の瞳が、エリアナの唇を見つめている。

「あの……」

「嫌か？」

でもエリアナは拒絶しなかった。できなかった。ヴァレンに触れられることが、決して嫌ではなかったから。

ヴァレンの唇が、エリアナの唇に重なった。

柔らかく、でも強引な口づけ。エリアナは目を見開いたが、すぐに目を閉じた。初めての口づけに、頭の中が真っ白になる。

唇が離れると、ヴァレンは満足そうに微笑んだ。

「初めてか」

「……はい」

顔を赤らめて頷くエリアナを、ヴァレンは優しく抱き寄せた。

「なら、俺が教えてやる」

そう言って、再び唇を重ねる。今度はゆっくりと、丁寧に。エリアナの唇を舐め、小さく開いた隙間に舌を滑り込ませる。

「んっ……」

エリアナは小さく声を上げた。舌が絡み合う感覚に、全身が熱くなっていく。

ヴァレンは巧みにエリアナの舌を誘い、深い口づけを繰り返した。やがてエリアナも、恐る恐るヴァレンの舌に自分の舌を絡ませる。

レロ……レロ……

濡れた音が部屋に響く。唾液が混じり合い、糸を引く。

「……そうだ……上手いぞ」

ヴァレンは唇を離すと、エリアナの耳元で囁いた。その声は、いつもより低く、甘い。

「ヴァレン様……」

「もう様はいらない。ヴァレンと呼べ」

「でも……」

「命令だ、エリアナ」

その言葉に、エリアナは小さく頷いた。

「……ヴァレン」

「いい子だ」

ヴァレンは満足そうに微笑むと、エリアナを抱き上げてベッドへと運んだ。柔らかい寝具の上に降ろされ、エリアナは見上げる。

ヴァレンがエリアナの上に覆い被さってくる。その瞳は、獲物を見つめ

る獣のように鋭い。

「怖いかな」

「……少し」

「だが、拒絶はしないんだな」

ヴァレンの手が、エリアナの頬を撫でた。

「お前は不思議な女だ。俺に怯えもせず、むしろ受け入れようとする」

「だって……」

エリアナは、ヴァレンの胸に手を置いた。その下で、心臓が力強く鼓動しているのが分かる。

「ヴァレンは、私を拒絶しなかったから」

「……それだけか」

「それと……」

エリアナは顔を赤らめながら、小さく呟いた。

「ヴァレンのこと……好きだから」

その言葉に、ヴァレンは動きを止めた。信じられないという表情で、エリアナを見つめている。

「……何だと？」

「好き、です。ヴァレンのことが」

エリアナは恥ずかしさで目を逸らしそうになったが、勇気を出してヴァレンを見つめた。

「だから……ヴァレンが望むなら、私は……」

言葉を最後まで言い終える前に、ヴァレンが再びエリアナの唇を奪った。今度はさっきよりも激しく、貪るような口づけ。

「馬鹿な女だ」

唇を離すと、ヴァレンは苦しそうに呟いた。

「俺は影の王だ。お前のような純粋な女が愛すべき相手じゃない」

「それでも、好きです」

エリアナの真っ直ぐな瞳に、ヴァレンは溜息をついた。

「……分かった。なら、お前は完全に俺のものだ」

そう宣言すると、ヴァレンはエリアナの服に手をかけた。ゆっくりと、でも確実に、布を剥いでいく。

エリアナは恥ずかしさで体を強張らせたが、拒まなかった。ヴァレンの手が、露わになった肌を撫でる。

「綺麗だ……」

ヴァレンの囁きに、エリアナは顔を背けた。でもヴァレンは彼女の顎を掴み、顔を向けさせる。

「俺から目を逸らすな。お前の全てを、俺に見せろ」

その命令に、エリアナは頷くしかなかった。

ヴァレンの手が、エリアナの胸に触れた。柔らかな膨らみを包み込むように揉みしだく。

「あっ……」

エリアナは思わず声を上げた。初めて触れられる感覚に、体が震える。

「敏感だな」

ヴァレンは愉しそうに微笑むと、指先で先端を転がした。

「んっ……ヴァ、レン……」

「いい声だ。もっと聞かせろ」

そう言って、ヴァレンは顔を近づけ、舌で先端を舐めた。

「ひゃっ♡」

エリアナは背中を反らせた。舌の感触に、全身が痺れるような快感が走る。

ヴァレンは容赦なく、エリアナの胸を愛撫し続けた。舐め、吸い、甘噛みする。その度にエリアナは甘い声を上げる。

チュパ……レロ……チュツ……

濡れた音が響く。ヴァレンの舌が、敏感な先端を執拗に転がし、時折歯で優しく噛む。

「ヴァレンっ……あっ、んっ♡」

「そんなに感じるのか。可愛いな」

ヴァレンの手が、エリアナの太腿を撫でた。ゆっくりと内側へと進み、最も敏感な場所へと近づいていく。

「待って……そこは……」

「待たない。お前は俺のものだ。隅々まで、俺が知る」

ヴァレンの指が、エリアナの秘所に触れた。既に濡れているそこを、指先でぬるりと擦る。

「あぁっ♡」

エリアナは思わず腰を浮かせた。今まで感じたことのない快感に、体が勝手に反応する。

「よく濡れている。俺を求めているんだな」

「ち、違っ……あっ♡」

否定しようとしたが、ヴァレンが指を秘所に挿入し、言葉が途切れた。

ぬちゅ……

湿った音とともに、ヴァレンの指がエリアナの中に侵入する。

「嘘をつくな。お前の体は正直だ」

ヴァレンは指を動かし始めた。ゆっくりと出し入れしながら、内側の敏感な場所を探る。

ぬちゅ……くちゅ……ぬぷ……

「んっ♡ あっ♡ ヴァレンっ♡」

エリアナは必死にヴァレンの肩にしがみついた。快感が波のように押し寄せて、理性が溶けていく。

ヴァレンは指を二本に増やし、エリアナの中をかき回す。同時に親指で、敏感な突起をくりくりと擦った。

「ひあっ♡ そこっ♡ だめっ♡」

くちゅくちゅと卑猥な水音が部屋に響く。エリアナの秘所は、ヴァレンの指を咥え込んで蜜を溢れさせている。

「そろそろ限界か」

ヴァレンは指の動きを速めた。くちゆくちゆぬちゆぬちゆと激しい音を立てながら、エリアナの中を挟る。

「ダメっ♡ そんなっ♡ あっ♡ あああっ♡」

エリアナの体が大きく跳ねた。激しい絶頂に、視界が真っ白になる。びくんびくんと体が痙攣し、秘所がヴァレンの指を強く締め付ける。

余韻に浸るエリアナの上で、ヴァレンは自分の服を脱ぎ捨てた。鍛え上げられた体が露わになる。そして彼の股間には、既に硬く屹立した性器が天を突いていた。

「ヴァレン……」

エリアナは初めて見る男性器に目を見開いた。大きくて、硬くて、先端から透明な液体が滴っている。

「まだ終わりじゃない。これからが本番だ」

ヴァレンはエリアナの両脚を開かせると、その間に腰を下ろした。硬く屹立したものが、エリアナの入り口に押し当てられる。

ぐにゅ……

性器の先端が、濡れた秘所の入り口を押し広げる。

「俺のものになれ、エリアナ」

「……はい」

エリアナは頷いた。怖くないと言えば嘘になる。でも、ヴァレンとなら……この人となら、大丈夫だと思えた。

ヴァレンはゆっくりと腰を進めた。エリアナの狭い内部に、少しずつ侵入していく。

ぬぷ……ぬちゅ……

性器が、秘所の肉壁を押し広げながら奥へと進む。